

1. 助成対象事業	女性学・ジェンダー研究の発展に資する調査、研究、出版
2. 事業の区分	Seeds プロジェクト
3. 氏名/団体名	渡邊結南
4. 事業名	主婦と被災者の編み物を通じた家庭外のコミュニティ形成と、手芸に関するジェンダー構造への影響の実態調査
5. 助成額	
6. 事業実施期間	申請期間:2024/09/01 — 2025/08/31（※調査協力者および調査実施者双方の都合により、東北での現地調査のみ 2025 年 9 月に実施）
7. リンク	該当なし

8. 事業の目的

なぜ編み物や糸・布を使った芸術の実践は、高度な創造的表現技法でありながら、女性らしさや家庭的実用性の領域に押し込められてきたのか。本事業はこうした問いから出発し、編み物が歴史的に女性の家内労働や趣味活動として位置づけられてきた背景を踏まえ、その実践が現代社会においてどのように再編され、ジェンダー構造や地域コミュニティの形成にいかなる影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的として実施された。手芸の知的・美術的価値が過小評価されてきた背景には、近代以降の家庭・社会・学問におけるジェンダー構造および家父長制的な労働分業が深く関わっている。日本ではとりわけ 2010 年代以降、編み物が被災地の復興支援や公共空間での交流活動として再評価された一方で、男性の参加増加や編み物産業の多様化といった新しい動向も見られる。このような社会的変化に着目し、本調査は①男性による編み物実践の実態とそれが手芸を取り巻くジェンダー構造へ与える影響、②東北被災地における編み物活動の継続的役割の二つの側面から、編み物の脱ジェンダー化の可能性と、地域社会での包摂的実践としての編み物の意義を検証することを主要な目的とした。

9. 実施内容

本事業では、質的調査によって都市部・被災地の双方にて次の二つのプロジェクトを並行して実施した。当初は「東北被災地における男性参加者を含む編み物実践の調査」を計画していたが、震災直後に活動していた女性以外の参加者および運営者を含む編み物グループの多くが既に解散しており、主要メンバーの高齢化や健康上の事情、連絡網の途絶などにより、当時の参加者へのアクセスが極めて困難であることが明らかとなった。こうした状況を踏まえ、調査設計を柔軟に再構築し、都市部と被災地を対象とする二本立ての調査へと方針転換した。

第一に、東京都内を中心とした男性ニッターへの半構造化インタビュー調査を行った。毛糸店への協力依頼や紹介を通じて 9 名の調査協力者を得て、対面およびオンラインにて、編み物との出会い、継続の動機、社会的受容の経験、編み物に対する自己認識等について聞き取りを行った。

第二に、東北被災地（宮城県気仙沼市）でのフィールドワークとして、「梅村マルティナ気仙沼 FS アトリエ株式会社」および地域住民による手芸会「あそびーばー木曜手芸会」を訪問した。震災後から継続する編み物活動の現場を見学し、参加者・運営者への聞き取り、関連施設の訪問、地域の女性支援活動の視察を行った。

10. 事業の成果と自己評価

成果は、①男性ニッターへのインタビュー調査、②東北におけるフィールドワーク、③社会発信・アウトリーチ活動（TEDx Talk）、の三点から構成される。これらは、編み物を取り巻く女性化された言説と社会的な実践の変容を体系的に把握するための基礎資料として重要な役割を果たした。

まず、男性ニッターへのインタビュー調査では、これまで国内外でほとんど研究対象とされてこなかった「男性による編み物実践」という領域に質的データを蓄積できた点に大きな意義がある。当初は、男性が編み物を通

してジェンダーをどのように再構築しているかを検討する予定であったが、実際の参加者からは「フェミニンな文化領域に参加している」という自覚的実践よりも、むしろものづくりの構造美や、用の美の精神に見られるような、つくる行為が孕む身体性に惹かれて継続しているという語りが多く示された。注目すべきは、複数の参加者が「女性であれば趣味として続けられるのに、男性は編み物を“職業化”することを周囲から期待された」という証言である。これは戦後日本社会における家父長制的な労働分業が、編み物を女性の趣味として金銭化することに成功したネオリベラルな市場構造と接続し、結果として男性に対しては趣味としての編み物の継続可能性を狭めるという逆説的作用を生んでいることを示唆している。この点は、手芸実践のジェンダー構造が女性を抑圧するだけでなく、男性に対しても特有の制約を生じさせているという、より複雑な力学を議論する上で重要である。また、自身のファッション性や周囲との関係性によって編み物を受容されやすかった男性の語りは、手芸を取り巻くジェンダー規範が一枚岩ではなく、個人の身体性・パーソナリティ・社会的位置によって多様に作用していることを示しており、男性性の複数性 (plural masculinities) に関する議論を発展させる上でも貴重な資料となった。

次に、東北・気仙沼でのフィールドワークでは、震災直後から編み物が果たしてきたコミュニティ形成の役割と、その実践が現在どのような形で地域社会へ根付いているのかを検証した。梅村マルティナ気仙沼 FS アトリエでは、元は地域の外部で始まった企業的なイニシアチブによる編み物事業が被災地の復興に伴走するように参画し、地域住民の雇用創出と共生的コミュニティの形成に寄与しており、参加者が編むという行為を通じて生活のリズムを取り戻し、生きがいを再構築してきた様子がうかがえた。また、気仙沼の地域社会の人々と関わる中で、あそびーばー木曜手芸会とも出会った。そこでは、震災当時に避難所で共有された子供の居場所作りを目的とした互助の精神が14年経った現在も継承され、親世代が働きに行く中で地域の高齢者が子供達を見守りながら手芸品を製作し、その売り上げを子ども支援に充てるといった、地域循環型のケア実践へと発展していた。これらの事例は、編み物が単なる趣味や生産行為にとどまらず、ケアの実践や地域社会への還元性、および非貨幣的な人的繋がりへの価値の共有などの、複合的な社会的意義を発揮していることを明らかにした。

さらに、本事業の一環として登壇した TEDxWasedaU においては、既存研究に基づき編み物と女性の主体性の関係を一般社会に向けて発信し、研究内容の社会還元を実現した。300名以上の観客を前に実施したスピーチは、研究テーマの公共的意義を可視化し、今後の調査成果の普及基盤を広げる契機となった。

以上を踏まえ本事業は、編み物に内在する女性化された言説を批判的に検討しつつ、それを超えて編み物が誰に開かれ、いかなる社会的役割を担うのかを実証的に示した点に学術的貢献がある。特に、男性ニッターの語りと被災地コミュニティの実践を並置して分析したことで、「編み物の脱ジェンダー化」と「ケア・連帯の文化としての再評価」という、架橋的で新たな視点が得られた。今後は、収集したデータの質的コーディングを進め、より理論的な分析へと発展させるとともに、学会発表や論文の形で成果を公表する予定である。また、本調査を通して収集したデータは今後の質的コーディングと論文化に耐えうる内容であり、女性学・文化研究・ジェンダー社会学の領域における研究基盤として高い有用性を有していると考えている。

11. 成果物

1. 調査報告書 (本最終報告書を調査報告書として提出) : 「2024年度上野千鶴子基金助成金最終報告書」一式
2. アウトリーチ活動に関する成果物 : TEDxWasedaU メインイベント スピーカーとしてのパフォーマンス
- TEDx Talk 本編動画 URL (TEDx Talks 公式チャンネルより)
<https://www.youtube.com/watch?v=r7rBUog8LRc>
- 広告資料 (ポスター・告知文) : TEDxWasedaU 公式 SNS からの投稿
- 当日の登壇写真 : TEDx WasedaU メインイベント 2025 : イマジナリウム 発表の様子 合計 2枚
- 使用パワーポイント資料